

ポリシーブック2013年

愛知県農協青年組織協議会

J A 青年組織綱領

我々 J A 青年組織は、日本農業の担い手として J A をよりどころに地域農業の振興を図り、J A 運動の先駆者として実践する自主的な組織である。

さらに、世界的視野から時代を的確に捉え、誇り高き青年の情熱と協同の力をもって、国民と豊かな食と環境の共有をめざすものである。

このため、J A 青年組織の責務として、社会的・政治的自覚を高め、全国盟友の英知と行動力を結集し、次のことに取り組む。

1. われらは、農業を通じて環境・文化・教育の活動を行い、地域社会に貢献する。

J A 青年組織は、農業の担い手として地域農業の振興を図るとともに、農業を通じて地域社会において環境・文化・教育の活動を行い、地域に根ざした社会貢献に取り組む。

1. われらは、国民との相互理解を図り、食と農の価値を高める責任ある政策提言を行う。

人間の「いのちと暮らし」の源である食と農の持つ価値を高め、実効性のある運動の展開を通じて、農業者の視点と生活者の視点を合わせ持った責任ある政策提言を行う。

1. われらは、自らが J A の事業運営に積極的に参画し、J A 運動の先頭に立つ。

時代を捉え、将来を見据えた J A の発展のため、自らの組織である J A の事業運営に主体的に参加するとともに、青年農業者の立場から常に新しい J A 運動を探求し、実践する。

1. われらは、多くの出会いから生まれる新たな可能性を原動力に、自己を高める。

J A 青年組織のネットワークを通じて営農技術の向上を進めるとともに、仲間との交流によって自らの新たな可能性を発見する場をつくり、相互研鑽を図る。

1. われらは、組織活動の実践により盟友の結束力を高め、あすの担い手を育成する。

J A 青年組織の活動に参加することによって、個人では得られない達成感や感動を多くの盟友が実感できる機会をつくり、このような価値を次代に継承する人材を育成する。

(注釈) 本綱領は、J A 全青協設立の経過を踏まえて「鬼怒川 5 原則」「全国青年統一綱領」の理念を受け継ぎ、創立 50 周年を契機に現代的な表現に改めるとともに、今後目指すべき J A 青年組織の方向性を新たに盛り込んだものである(平成 17 年 3 月 10 日制定)。

目次

はじめに	・・・・・・・・P.	1
J A あいち知多 大府地域	・・・・・・・・P.	2
東浦地域	・・・・・・・・P.	4
東海地域	・・・・・・・・P.	5
阿久比地域	・・・・・・・・P.	8
知多地域	・・・・・・・・P.	9
半田地域	・・・・・・・・P.	11
武豊地域	・・・・・・・・P.	12
美浜地域	・・・・・・・・P.	13
南知多地域	・・・・・・・・P.	14
J A 西三河	・・・・・・・・P.	15
J A 愛知みなみ	・・・・・・・・P.	17
J A 豊橋	・・・・・・・・P.	19

はじめに

愛知県版ポリシーブック2013は、県下青年部員一人一人のありのままの意見・考え方を尊重すべく、県下4JA11組織のから提出された単組版ポリシーブックを集約することなく、全部掲載する形で作成することとした。

とりわけ、幼稚園児や小中学生をはじめ、その保護者への農業の重要性、食の重要性を発信すべく、食農教育活動の充実・強化、地産地消の推進、地域活動への参画を課題としたものが、3JA5組織（JAあいち知多大府地域、東海地域、阿久比地域、JA西三河、JA愛知みなみ）からあがっている。

また、部員の増加による組織力の強化・青年部活動の活性化を課題としたものが、2JA9組織（JAあいち知多東浦地域、東海地域、阿久比地域、知多地域、半田地域、武豊地域、美浜地域、南知多地域、JA愛知みなみ）からあがっている。

その他、JAと農家の関わり方を課題としたもの（JAあいち知多東海地域）、後継者問題、農業経営の改善を課題としたもの（JA豊橋）、TPP交渉に関する内容（JAあいち知多知多地域、JA豊橋）があがっている。

JA あいち知多青年部ポリシーブック 2013

<大府地域>

「食農教育」

はじめに

JA あいち知多青年部大府地域は、作物を「育てる」「収穫する」「食べる」ことを体験してもらい、生きることの基本的な要素である「食」とそれを支える「農業」の多面的な役割を知ってもらうことを目的に、平成24年度より食農教育活動に取り組んできた。活動内容としては、大府市内の保育園児への農業体験学習の開催等を行っている。

今年度は活動2年目ということで、昨年度の課題への取り組み、今年度の現状・課題の把握、課題の解決のためのグループワークを実施した。

今年度の活動を踏まえ、青年部の活動方針を共有し、今後の食農教育活動を展開していくため、前年度に引き続き2013年度版ポリシーブックを作成した。

○平成25年度「食農教育活動」スケジュール

平成25年 5月28日 田植え

7月 8日 グループワーク

10月 9日 稲刈り

10月21日 グループワーク

(予定)平成26年 1月 9日 保育園での餅つき

※その他、田んぼの石拾いや、草刈、保育園との打ち合わせを随時行った。

(1) 現状と課題及び課題解決に向けての考え方

・ 作業の流れはスムーズになったが、作業の統一化ができておらず、部員が戸惑う場面があった(定植株数・収穫株数・刈り取りの長さ等)。

→ 作業をマニュアル化した上で、ひとりひとりの園児に合わせた対応をする。

・ 園児への説明は、作業のやり方だけでなく稲や周りの環境についての説明も必要ではないか

→ 説明ツールを用いて、園児たちに体験だけでなく、植物・環境も知ってもらう。

- ・ 園児とのコミュニケーションがうまくとれていないのではないか
→ コミュニケーション力の向上、園児の心をつかむための工夫をする。
- ・ 青年部活動のPRが不足している。
→ 市役所・JA広報・新聞など、マスメディアへの情報発信・周知PRの強化をする。

(2) 次年度への青年部の方針

- ・ 作業の効率化に向けて、作業の事前打ち合わせの徹底、作業マニュアルの作成。
- ・ 園児と保護者により農業を知ってもらうため、紙芝居の作成（稲のなりたち）、田んぼの昆虫図鑑の作成。
- ・ 青年部大府地域を知ってもらうため、各メディアへの食農教育活動の年間スケジュールの通知、地道なPR活動を積み重ねていく。

(3) 行政・JAに対しての要望

- ・ 三位一体となった食農教育活動の計画策定・進行。
- ・ 遊休農地解消のための取り組みの強化。
- ・ メディア等を活用した青年部活動の発信。

<東浦地域>

「青年部活動の活性化に向けて」

(1) 現状と課題

- ・ 後継者不足や担い手・青年農業者減少から青年部活動が縮小し、部員の集う場が少なくなってきた。また、地元や農業外の人との交流が少なくなっている。
- ・ 勉強会、農業経営、税務等の研修会が少ない。また、研修の内容については部員間で業種が異なるため、開催が困難である。
- ・ 青年部員とJA職員との交流が少ない。

(2) 解決に向けての考え方

- ・ 青年部員のほとんどの方が農業経営の中心であり、有意義な研修会とすることにより参加を促していく。
- ・ 生産作目が各部員異なり全員集まれる時間がないが、研修内容もしくは視察先圃場を限定し巡回視察を行うなどの手段を講じる。
- ・ JA職員との交流の場、さらに家族も交えた交流会、大人から子供まで楽しく行うことができるとよい。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 青年部員の経営を巡回視察の実施により、部員間の相互理解を図る。
- ・ JA職員を超え家族も含めた交流会の開催の検討。
- ・ 地元の園児、老人ホーム、保養所などの普段交流の無い方たちとの交流の場を作り、農業理解を促す。
- ・ 産業まつりへ青年部として全員が参加できるような形態を検討していく。

(4) 行政への要請すること

- ・ 青年部員の農畜産物をアピールできる場を設けていくための検討を行う。
- ・ 産業まつりへの参加へ向けた町やJAとの調整。

<東海地域>

「青年部活動の将来性について」

(1) 現状と課題

- ・ 新規部員の加入だけでなく若手農業者が少なく、部員数が減少している。
- ・ 各作目の役員が行事の運営を行っており、負担が増加している。
- ・ 東海には4HクラブがありJA青年部員とほぼ同様の活動内容となっている。JA青年部活動としてのメリットが見いだせない。
- ・ 地域内の青年農業者同士の結束が元から強いため、交流活動の場としての魅力は希薄である。

(2) 解決に向けての考え方

- ・ JA青年部に未加入の青年農業者への加入推進活動を行う。
- ・ 各作目役員負担の軽減に向けた体制の整備や周知を行う。
- ・ 入部後のメリットを作り出し、部員の集まる場として魅力あるものとする。
- ・ 青年部活動を通じて部員同士の交流を活性化させ、それぞれの青年部員が自己を高めていけるような場の提供を行う。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 加入推進は、地域の役員や4Hやその他新規就農者で未加入の者と面識のある部員からの声掛けを行う。また、若い農業者との積極的なコミュニケーションを図る。
- ・ 役員の役割の見直しを行い、持ち回りの担当部員を決めるなど、負担軽減を図る。さらに役員だけでなく、幅広い部員の協力・参加を仰いでいく。
- ・ JAを利用した農産物販売や生産などを視野に入れ、作目検討などを行っていく。
- ・ 女性との交流の機会を増やし、未婚部員のバックアップをしていく。
- ・ 自地域の農業を把握し部員同士の理解を深めるため、地域内の視察交流会を開催する。
- ・ 小中学校などで食育活動をして農業への理解を深め、農業を将来やりたい職業の一つにしていく。

(4) JAとともに取り組むこと

- ・ 新規就農者や若手農業者についての情報を共有し、推進活動に生かしていく。
- ・ 部員の生産作目・作物に関する情報提供を積極的に行ってもらい、青年

- 部員の販売活動に生かしていく。
- ・ 青年部員の農産物や青年部の存在を前面に出した小包などの商品を企画し、J A広報を活用したP Rや販売ルートの構築をするなどの販売メリットを作る。
 - ・ 行政やJ A、関係機関とともに、食育活動を展開させていく。

「J Aと農家の関わり方について」

(1) 現状と課題

- ・ J A職員の専門的な知識がないため、栽培技術などの質問ができない。
- ・ J A職員が圃場に来なく、コミュニケーションが少ない。
- ・ J Aの職務体制により、担当職員がすぐに異動になることが多くなった。職員による販売体制や生産者との繋がりがなかなかできない。
- ・ 営農事業以外の職員の顔や名前がわからない。

(2) 解決に向けての考え方

- ・ 身近な窓口として、農薬や栽培方法だけではない、幅広い知識を持つ職員の育成。
- ・ 生産現場の巡回により、J A職員の作物栽培技術の習得や生産者とのコミュニケーションを図ることができる。
- ・ 営農事業だけでなく、支店など、J A全体としての交流の場を作る。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 青年部員によるJ A職員の訪問を積極的に受入れ、コミュニケーションをとる。
- ・ 青年部員とJ A職員との交流会や懇親会の開催。

(4) J Aとともに取り組むこと

- ・ 交流会や研修会等への職員の積極的な参加を促す。
- ・ J A職員とともに農薬や新しい栽培技術の検討、視察研修へ積極的に参加する。
- ・ 支店職員へ営農事業集荷などの参加を呼び掛ける。
- ・ 新規就農者や規模拡大希望者に対し、積極的に農地の紹介や生產品目の提案をし、同時に指導・販売もしていく。

- ・ 青年部員の J A への職場体験や、逆に J A 入組者が生産者の圃場に職場体験などをし、相互理解を図っていく。

<阿久比地域>

「青年部阿久比地域における地域活動の活性化について」

(1) 現状

青年部阿久比地域は14名の部員がおり、経営作目は稲作・畜産・そ菜・花きなど多様である。食農教育としての田植体験補助や部員間の交流を広げる活動をしている。

(2) 課題

- ・ 青年部員の高齢化や後継者などの若年就農者の減少により、新規加入者よりも脱退者が多くなっている。
- ・ 多様な経営作目のため、本部活動など全地域活動への参加が困難である。
- ・ 本部活動への協力は役員中心になり、役員就任は負担となっている。

(3) 解決に向けた取り組み

- ・ 部員とJAとの間で新規就農者や後継者などの情報を共有し、青年部加入条件の該当者へ迅速に加入推進をしていく。
- ・ 4Hクラブ・営農研究会のメンバーは青年部と重複しているため、その活動に協賛する形で青年部地域活動の幅を広げることは可能か、検討していく。
- ・ 各部員が参加できるよう日程・時間を検討し、部員の交流を活性化するための地域行事の充実を図る。

(4) JAとの協力

- ・ 青年部役員の負担が大きくなるよう部員・JAの協力体制を整える。
- ・ 営農センターとの情報交換を行い、様々な情報共有や地域活動を充実させる。

<知多地域>

「J A青年部の今後について」

(1) 現状と課題

- ・ 農業者の高齢化が進み、担い手や若手農業者が減少傾向にある。
- ・ 新規加入者の減少に伴い、J A青年部全体の高齢化と青年部活動のマンネリ化が起こっている。
- ・ 知多市4Hクラブとほぼ同じメンバーのため、J A青年部としての活動のメリットが見いだせない。

(2) 解決に向けての考え方

- ・ J A青年部への加入推進活動の促進。
- ・ 若手農業者同士のつながりや若手農業者と先輩農業者の意見交流の充実化。
- ・ J A青年部組織活動のメリットを見だし、活動の活性化につなげる。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 青年部活動を通して農業の魅力を世間に伝え、若い人々に農業に関心を持ってもらえるように努力し、新規就農者を増やしていく。
- ・ 新規就農者や青年部員との積極的なコミュニケーションを図り、指導や情報交換を行い、経営作目に限らず幅広い農業技術や知識の共有化を図る。

(4) J Aとともに取り組むこと

- ・ J A青年部の活動内容、つながりや農業に対する想いをPRできる環境づくりを行う。
- ・ 青年部加入推進のため、新規就農者や若手農業者についての情報を共有する。
- ・ 青年部員への栽培技術、農産物の販売ルートなどの情報提供により、J A青年部加入メリットを作る。

「T P Pへの対応について」

(1) 現状と課題

- ・ T P P交渉の難航とT P Pへのなし崩し参加の危険性がある。
- ・ T P P参加した場合、農産物や国民生活への影響が大きく、部員が理解を

深めていない。

(2) 解決に向けての考え方

- ・ T P P への理解を高め、T P P 参加による国民への影響や農業経営への影響について、またその対策についての理解が必要である。
- ・ 農業者として、農村社会を破壊しかねない内容での T P P 参加への反対運動を行う。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 青年部員を対象とした T P P 等の勉強会を開催して、部員の理解を高める。
- ・ 青年部員内で T P P に対する対策活動を考え、取り組んでいく。

(4) J A とともに取り組むこと

- ・ T P P の学習会への参加や対策検討会などの開催により、最新の情勢報告等の情報を共有し、青年部を超えた理解活動を展開する。
- ・ 農村社会を破壊しかねない内容での T P P 参加への反対運動等の組織活動と、理解活動のための情報発信に協力していく。

<半田地域>

「青年部組織活動の今後」

(1) 現状と課題

現在のT P Pの対応・報道等で表されるように、現在の一般社会における農業分野の位置・価値は決して高いものではなく、むしろ金融・保険・医療・福祉等サービス分野に対しては後塵を拝している状況であることは否めない。

現在農業をかんがみると、従来からではあるがその特性として（例外も増加しているが）基本的には家族を中心とした労働力にて成り立っている状況である。これを放置すれば家族外の一般社会とのコミュニケーション・情報交換・人的交流の場は限りなく無に近いものとならざるを得ない。

上記を一因として農業事業の閉塞感化・封建化・失速感が一層拍車をかけ、農業全体の縮小化・失速感化が一層拍車をかけ、農業全体の縮小化・脱農業に陥る負のスパイラル化に歯止めがきかない状況にある。

(2) 解決に向けての考え方

上記状況を一足飛びに改善・改良することはほぼ不可能であるが、現在農業後継者・新規就農者としてのJA青年部に対しては、上位団体からの研修・催事ごとはあるもの現場単位での行事・取り組み事は概ね定型化・形骸化している。そこで、地域単位での他の組織、JAは無論のこと、行政・商工会等との連携・交流の場を設け、さらに可能であるならば該当組織へ参画し、他分野の情報交換、人的交流を築き、広い視野から自産業（農業）の見直し・改良の一素材を獲得・紹介し、各部会員の経営の発展を促し、あわよくば、他業種からのヒントを取り入れた実例（成功例ならなおよいが）を文書化・明示化等して情報共有できるものを蓄積し、青年部勧誘等の場で青年部メリットとして訴えられるものを作成する。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 営農だけでなく、支店JA職員との交流の場を設け、青年部員とJA職員との交流を図る。
- ・ 他業種団体（商工会等）への参画を積極的に行い、青年部活動の幅を広げていく。

(4) 広く協力を求めること

青年部活動の理解を促進し、他業種団体との協力体制を強固にしていく。

<武豊地域>

「青年部組織活動の今後」

(1) 現在の状況

- ・ 全国的な農業者の高齢化や担い手の減少がある中、当地域でも若手農業者が減少している。それに伴い、青年部員の加入減少と青年部員高齢化による脱退増加が起こっており、部員活動の維持が困難となっている。
- ・ 若手農業者が多様な組織へ加入しており、青年部活動への参加が少なくなる傾向がみられる。青年部活動の活動意義の希薄化や他活動と比べたメリットが少なく感じている。

(2) ねらいと今後の展開

- ・ 若手農業者のつながりを充実させるための集う場として、組織活動の魅力を再確認し高める。
- ・ J A青年組織の参加メリットを創造することによって活動参加を促し、青年部活動の活性化につなげる。
- ・ 青年部員の減少による部員個人の活動負担を軽減するため、活動体制の見直しを行い、継続可能な体制を構築する。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 町の行事や産業まつり等のイベントへ積極的に参加し、J A青年部のアピールを行う。
- ・ 新規就農者・若手農業者が魅力やメリットを感じられるような、青年部活動の検討。

(4) 広く協力を求めること

J A青年部全体で取り組む青年部活動を行い、青年部員間での活動や情報の共有を図る。

<美浜地域>

「青年部活動に対する意識向上について」

(1) 現状と課題について

- ・ 青年部部員の活動への参加が、活動内容の好みやメリットの有無で判断されてしまう。部員間交流はSNS等のツールで図れるため、交流の場としての青年部活動の魅力が希薄化している。
- ・ 青年部員は経営の中心となる農業経営者であり、農繁時期や作目、結婚の有無、他の地域活動（消防団等）の兼ね合いによっては活動への参加ができない場合が多い。
- ・ 青年部員の経営作目が多岐にわたり、さらに年齢や考え方、知識などが異なり、青年部活動の方向性の意思決定が困難である。
- ・ 県青協の活動へ取り組むことにより地域役員への負担の増大となり、地域活動の充実が図られない。特に、地域役員がボランティア化してしまうことにより、青年部活動への意欲低下を招いている。

(2) 現状や課題の解決に向けた解決策について

- ・ 本部活動は輪番性ではなく、自主的な参加申し込みがあった場合のみの参加とし、強制的な参加をなくす。
- ・ アンケート等で部員への意識調査の実施。（青年部へ所属する目的等）
- ・ 役員を中心に部員全員で魅力的な活動作り。

(3) 青年部として取り組むことの提案について

- ・ 部員の意見の集約。
- ・ 本部活動への参加の有無は地域役員会にて決定する。
- ・ 地域活動の仕訳を行い、部員のニーズや時代の流れに合わせて変化させる。

(4) JAや行政とともに取り組むことへの提案について

- ・ 青年部員への有益な情報提供を求める。
- ・ 新規就農者への投資や補助を行い、就農しやすい環境を作る。
- ・ JA、青年部、普及課との連携。

<南知多地域>

「部員の行事参加率の増加について」

(1) 現状と課題

- ・ 青年部活動の減少によって、青年部組織としての存在意義の希薄化
- ・ 例年活動（産業まつり・親睦会等）の内容のマンネリ化から部員の参加率も減少してきている。
- ・ 近年、新規就農者が増加しており、平成24年度は青年部に6名加入した。
（平成25年4月現在部員数20名）

(2) 解決に向けての考え方

青年部としての意義・意味を考え、部員にプラスになる活動を提案し、参加率を上げる。参加率を上げることにより部員間の連帯感を強めさらに活動の幅を広げていく。

(3) 青年部として取り組むこと

- ・ 新規活動又は既存の活動の拡大。
- ・ 青年部員間の積極的な意見交換等交流を行う。

(4) 行政・JAとともに取り組むこと

活動に対する支援。

J A 西三河青年部ポリシーブック 2013

はじめに

J A 西三河青年部は現在部員 86 名を数え、発足から 13 年が経ちました。近年、農業をとりまく環境は大変厳しく、農畜産物価格の低迷が続く中、農業経営の存続が大変厳しくなっています。これから先数十年、農業を担う存在として自分たちの農業経営を少しでもよくしたい、青年部としてなにかできることはないかと考え、ポリシーブックという青年部員から出た意見をまとめた政策提言集について平成 23 年度から取り組んでおります。

初年度は「生産コスト」、「地産地消」の 2 つをテーマについて話し合いを進め、昨年度には、地域住民に自分たちの農畜産物をより知ってもらおうと「地産地消」のテーマを引き続き協議をしていき、青年部で何か作ってみよう、そして販売してみようということを目指して話し合いを進めてきた結果、西尾産の抹茶を使った米粉ラスクと子供にも飲みやすいニンジンジュースを完成させることができました。

今年度につきましては、昨年度の試作品作りを生かし、販売できるものを作ろうと協議を重ねてきました。そこで、西尾産抹茶 100% 使用の抹茶ペットボトルを作成しようと動いています。また、学校給食に部員の農産物を取り入れることができないかと市と学校とで導入を進めているところです。

新しい何かを作り出すのは自分一人ではなかなか難しく、今回ポリシーブックに取り組むにあたり、部員の力が何よりも必要だと強く感じました。

今後も継続して今回作成したポリシーブックに取り組んでいき、部員の力を結集し、新たな課題についても協議してよりよいものにしていき、自分たちの農業経営に活かしていきたいと思っております。

J A 西三河青年部
部長 赤堀 正光

・地産地消の推進について

(1) 現場の現状

現在、7店舗あるAコープ及び憩の農園の売り場には産直コーナーはあるものの、JA西三河産農産物があまり置いていない。また加工品についてもJA西三河ブランドのものは少ない。

(2) ねらい

地元産の農産物をAコープ、憩の農園に売り場のスペース拡大、さらに地元産農産物を使用した加工品を開発し、JA農業まつりや地域・青年部のイベントなどで販売し、地産地消の促進をねらう。

(3) 考え方・やり方

- ・ Aコープ、憩の農園などに地元産の農産物売り場のスペースを拡大するとともに地元産農産物を地域の方に広くPRできるような宣伝をして多くの人に地元農産物を知ってもらう。
- ・ 加工品については規格外農産物を使用したり、また当青年部は様々な作物を栽培しているため、各部員で栽培している農作物を取り入れた商品を開発し、販売する。

(4) 個人・青年部ができること

- ・ JA農業まつりや地域・青年部のイベントなどで地元農産物の即売会などを行い、地域の方に地元農産物をPRしたり、加工品を販売する。また農産物を使った簡単にできるレシピを提供する。
- ・ 若い人向けの新しい食べ方の提案を行い、幅広い世代にPRする。加工品については規格外農産物及び青年部員の各作物を取り入れたオリジナル商品を提案し試作品を作り、JA役職員との意見交換会等を通して販売できるかどうか依頼する。
- ・ 個人としては、外食する際にはできるだけ地元産食材を使用した店を選び、自らも地産地消を意識する。

(5) 市・県・国・JAに求めること

- ・ 食料自給率の低迷が懸念される中、国内産・地元産農産物の価値を高める活動をしてもらう。
- ・ JAに対しては規格外農産物を有効活用できるような施設・工場をつくり、加工品を積極的に販売してもらう。
- ・ またAコープ・憩の農園に地元産農産物を消費者に意識してもらえりような売り場作りを依頼し、加工品について置いてもらう。

J A 愛知みなみ青年部ポリシーブック 2013

1. はじめに

我々が J A 愛知みなみ青年部は、平成 13 年度に発足して 12 年が経過しました。現在、10 部門 158 名の部員が活動しています。

農業を取り巻く環境は、昔に比べ厳しいものになっています。今後開始される TPP（環太平洋パートナーシップ協定）問題もあり、農業経営は存続の危機を迎えていると感じます。

我々青年部は「近い将来地域で生活する子どもたちに何を教えることができるのか」と考え、本年度は『この地域で生活する子どもたちへの SYOKU I K U』を基盤として活動に取り組んでいます。

* SYOKU I K U…食育・飾育・植育・職育

2. 2013 年度の SYOKU I K U 活動

(1) キャベツ収穫体験

自分たちが普段何気なく食べているものが、「どのような場所ででき、どのような形をしていて、どうやって収穫するのか」を体験してもらいました。様々な疑問や質問が出ました。

普段は包丁を使って収穫しますが、「どれだけキャベツが地面に根を張っているか？」また「どれだけ重いか？」を感じてほしいため、子どもたちには 3～4 人の一組が協力して引き抜いてもらう方法にしました。収穫後、それぞれ自宅に持ち帰ってもらいました。

幼稚園のみなさん、青年部役員や手伝ってくれた方々、ありがとうございました。

(2) J A 愛知みなみ青年部員の SYOKU I K U

我々青年部員の中でも、農産物の流れや植物の生産現場・流通現場を知らない人が多いはずなので、前記の行事や視察研修などを通じて部員自身の SYOKU I K U にも役立てばよいと考えています。

(3) J A 愛知みなみ青年部員の確保

本年度は、J A 愛知みなみに出荷している若者たちが職種の垣根を取っ払って、疑問や悩みを相談したり仲間を作ったりして親睦を深めてもらうためにボーリング大会や懇親会を開催しましたが、参加人数は予想を下回るものでした。

今後は様々な活動に参加してもらい、青年部員同士の縦の繋がり（年功序列）ではなく、横の繋がりを広げて、人間関係の構築を図ってくれることを

期待しています。

3. 今後のJ A愛知みなみ青年部

J Aや田原市にも協力してもらい我々の活動をPRすることによって、青年部の地域に根差した活動をより多くの地域の方々に知ってもらえることを目指しています。また、個々のスキルを向上させ、将来の地域農業の発展に関与するリーダーとなる人間を育みたいのです。

J A 豊橋青年部会ポリシーブック 2013

はじめに

我々 J A 豊橋青年部会は、1997年の J A 豊橋の合併により誕生し、結成17年目を迎えました。日本経済が緩やかな回復の兆しを見せる中、農業を取り巻く情勢は依然厳しいものとなっておりますが、こうした環境の中に活路を見出すべく、豊橋の農業の将来を担う我々は、青年としての誇りと情熱を持って本会を有意義な活動の場としていかねばなりません。消費者の「食」と「環境」に対する意識が高まる中、食糧の自給率向上や農業の多面的機能の重要性についても理解される状況にあります。我々は豊橋青年部会として、消費者はもとより行政・地域に対してなお一層の農業への理解を求めていかなければなりません。

そこで、我々の指針となるべき活動方針を明確にするため、部員一人ひとりが抱えている現状の課題を①農家として、②農業経営について分類・整理し、それぞれの課題を受けて青年部として取り組むこと、行政・J Aへの要望することについて検討を行いました。

(1) 現状と課題

①農家として

- ・ 家族経営のため、家族そろって休みがなかなかとれない。また、病気等により作業が遅れると重大な損害が出る。
- ・ 後継者不足により高齢化している。
- ・ 労働時間の見直し。
- ・ 世代交代を円滑に行うためにはどうしたらよいか。
- ・ 婚活をしても農家に嫁に来る人がいない。

②農業経営について

- ・ 作物の価格が限度を超えて安くなる事がある。再生産可能価格を下回る。
- ・ 経営資材の価格が高騰する中、販売価格が上げられないため、利益を圧迫している。
- ・ 品目によっては機械化できない作業も多く、たとえ農地を集約しても、雇用しなければ経営は成り立たない。しかし、面積の拡大に伴って人材を雇用で対応できる農家は少ないのが現状である。

現状の課題を受けて

(2) 青年部として取り組むこと

- ・ 行政を絡めた食育を行うことによって子供たちに農業に関心をもってもらうと共に将来の後継者不足の解消を目指す。
- ・ 青年部活動の目標も明確にするために中期活動計画の素案を作成し、計画的に活動する。
- ・ 青年部活動を将来地域のリーダーとなるための育成の場と意識する。
- ・ 意見交換会を3年に一度ぐらいのペースで実施。

(3) 行政・JAへの要望

- ・ JA職員が遊休農地を使って農作物を作ってみたらどうか？
- ・ 農地集約的事業をもっと積極的に行って欲しい（民間企業参入阻止）。
- ・ 農家の労働力不足を解消できるような仕組みを作ってほしい。
- ・ 他産地との差別化（ブランド化）、JA農産物のPRを進めてほしい。
- ・ 経費の補助、支援。
- ・ 生産額の低い品目でも要望を聞いてほしい。
- ・ 道路、店舗などが新たにできると、農作業はしづらくなる（農薬散布等）。
- ・ 税金の減税、重油・電気代の補助、設備投資への助成緩和、遊休農地の有効活用（削減）
- ・ 就農者との交流や若い世代への食育が必要。
- ・ TPPへの対応はどうなっているのか。関税撤廃を阻止してほしい。